

クリストフ・シュリンゲンジーフ 『私の中の異物に対する不安の教会』 における芸術と宗教の越境（不）可能性

高橋 慎也

I. 「芸術家は神に重なり得るか」, 「芸術は宗教に重なり得るか」という 問い

2008年の初頭に肺癌の宣告を受けた当時48歳のクリストフ・シュリンゲンジーフ (Christoph Maria Schlingensief 1960–2010) は、死を迎える2010年までの間に『私の中にある不安の教会』(Eine Kirche der Angst vor dem Fremden in mir, 2008年9月 ルール・トリエンナーレ初演, 本稿では『不安の教会』と略記), および『メア・クルバ (我が贖罪)』(Mea Culpa 2009年3月 ブルク劇場初演)¹⁾ という二つの作品を制作し、その舞台はDVDとして発売されている²⁾。そのタイトルに明示されているように、これらは舞台制作者 (Theatermacher) かつアクション芸術家 (Aktionskünstler)

1) 「mea culpa」とはラテン語で「私の罪」という意味であり、キリスト教会の懺悔の際にも用いられる贖罪の言葉である。本論では東京ゲート・インスティテュートにおける上映の際に使用された『メア・クルバ (我が贖罪)』という作品名を踏襲する。参考: Oxford English Dictionary (OED Online) の定義: Used as an exclamation or statement acknowledging one's guilt or responsibility for an error; also in (mea culpa, mea culpa) mea maxima culpa.

2) 本稿で使用する『不安の教会』舞台映像DVDは下記の通りである。Eine Kirche der Angst vor dem Fremden in mir [2 DVDs], filmgalerie451, 2008.

であった彼が制作した芸術作品である³⁾。その中でシュリンゲンジーフは、思いがけない突然の癌宣告を受け死の不安に直面して苦悩する自らの体験を自己啓示 (Selbstoffenbarung) として提示している。たとえば『不安の教会』では、自分自身を「最後の晩餐」に臨むキリストに重ねながら自己啓示し、芸術家としての「自律性」(Autonomie) を「(苦悩に) 身をゆだねる」(sich entwerfen) ことに対置することによって、キリスト教とは異なる死生観を表現している。敬虔なカトリック教徒の両親のもとに育ち、少年時代は教会ミサの儀式補助を務めるほどキリスト教に親しんできた彼は、その後キリスト教から批判的な距離を取るようになる。癌宣告による死の不安に直面して再び真摯にキリスト教と向き合う必要性に迫られた緊急状況で、彼は上記二つの作品を制作し、舞台作品としてはそれらが彼の遺作となったのである。

『不安の教会』はシュリンゲンジーフによって「フルクサス・オラトリオ」(Fluxus-Oratorium) と命名されている。後述するようにフルクサスは戦後のアバンギャルド芸術運動であり、オラトリオはバロック時代に成立した演劇形式を持つ宗教音楽である。こうした異なる文化ジャンルを重ね合わせるオーバーラップ (Überblendung) の手法は、シュリンゲンジーフの典型的な制作スタイルである。彼は映画制作の分野で用いられるオーバーラップの手法を駆使しながら、「死と生」、「無垢と罪」といった対立する

3) 本稿で使用するアクションという芸術ジャンルは、シュリンゲンジーフが依拠した芸術家ヨーゼフ・ボイスのアクション行為の総称として使用する。ボイスのアクションについては下記の『日本大百科全書 (ニッポニカ)』(小学館ジャパンナレッジ Lib) の解説を参照。

ルドルフ・シュタイナーの人智学の影響を受け、直接民主制やエコロジーなどを中心とした社会変革の運動を、芸術作品として提示した。具体的には「アクション」とよばれる行為による芸術、オブジェ作品、そして討論など、従来の美術の枠を超えた多様な形式をとる。これはすなわち、芸術の概念を、理想社会の実現をめざす自由で創造的な活動すべてにまで拡張しようとするものであり、彼はこうした考え方に基づく自らの作品を総称して「社会彫刻」とよんでいる。[大谷省吾]

概念ばかりではなく、「家族愛と隣人愛」といった親近性の高い概念を、言葉、映像、音楽、舞台装置などを組み合わせながら対置し重ね合わせている。そして「芸術家は神に重なり得るか」、「芸術は宗教に重なり得るか」、「芸術において生と死は重なり得るか」という問いを検証し、その問いを観客にも投げかけるのである。こうした究極の問いへの解答は、当然のことながら『不安の教会』の結末部分でも明示されないままに終わる。

シュリンゲンジーフは『不安の教会』の中に、実に多様な文章、映像、音楽を引用している。その中でも特に重視されているのはヨーゼフ・ボイスのインスタレーション『汝の傷を見せよ』(Zeige deine Wunde 1976年ミュンヘン芸術フォーラム)、リヒャルト・ワーグナーの舞台神聖祝典劇『パルジファル』(Bühnenweihfestspiel "Parsifal" 1882年)、ウィーン・アクションニズムの芸術家ルドルフ・シュヴァルツコーグラーの『アクション』(Aktion 1965)である。シュリンゲンジーフは『パルジファル』を2004年にバイロイト音楽祭で演出し、賛否両論の論争を引き起こしている。この『パルジファル』演出において彼はキリスト教、ワーグナーのオペラ、バイロイト音楽祭をも批判的に検証し、こうした批判的検証作業を『不安の教会』の中でも継承している。それに対してボイスとシュヴァルツコーグラーを彼は、生と死の重なりあう時空間を探求した芸術家として肯定的に捉えている。『不安の教会』ではボイスの『汝の傷を見せよ』、シュヴァルツコーグラーの『アクション』とシュリンゲンジーフ演出『パルジファル』の映像のみならず、ハイナー・ミュラーやサルバドール・エリソンドなどの言説を引用して重ね合わせるという意味で、複数の作品間のオーバーラップの手法を用いている。

『不安の教会』の中で、十字架のキリストの最後の言葉としてシュリンゲンジーフ自身が想定した言葉は「私は自律している (Ich bin automon)」である。現世に生きる限りは神による救済を拒む彼自身の基本原則である自律性に立脚することによる「現世における自己救済」が可能か否か、現

世において「芸術宗教 (Kunstreligion)」による自己救済は可能か否か、という問いを『不安の教会』は提示している。シュリンゲンジーフの受難劇 (Passionsspiel) でもあるこのアクションはワーグナーの『バルジファル』と同様に、芸術と宗教の重なり合いの可能性、不可能性を考察するうえでも貴重な遺作である。この点で『不安の教会』は、シュリンゲンジーフ演出『バルジファル』、『メア・クルバ (我が贖罪)』を含め、『トリスタンとイゾルデ』演出 (バイロイト音楽祭 1993 年) の際にハイナー・ミュラーが基本理念として語った「不可能性への衝動」(Drang nach dem Unmöglichen)⁴⁾を継承した公演としても位置付けることができる。本稿ではシュリンゲンジーフのインタビュー、劇評、DVD 付属の公演パンフレットに記載されている様々な文章を検証することを通して、『不安の教会』上演当時のシュリンゲンジーフの芸術観と宗教観、さらには死生観の特徴について論述したい。

II. 制作者解説, 作品解説, パフォーマンス評, 先行研究の概要

II-1. シュリンゲンジーフと後期作品の日本とドイツにおける紹介

まず日本におけるシュリンゲンジーフの経歴および『不安の教会』関連の解説文を検証したい。2023 年の時点では事典による記載項目は無く、演劇祭や映画祭といったフェスティバル開催時に略歴がネット掲載されている。その代表的な例はゲーテ・インスティテュート主催「クリストフ・シュリンゲンジーフ特集」(2015 年) の下記の文章である。

クリストフ・シュリンゲンジーフ (1960–2010)

Christoph Schlingensief

4) Heiner Müller: „Es gibt Stellen, wo ich wirklich verzweifle“ von Monika Beer, 30. Dezember 2020, Erstveröffentlichung in Gondroms Festspielmagazin 1993. <https://rww-bamberg.de/2020/12/es-gibt-stellen-wo-ich-wirklich-verzweifle/>

1960年ドイツ・オーバーハウゼンで薬局を営む父親と看護師の母親の一人っ子として生まれる。一家は敬虔なカソリック教徒で子供時代は教会の堂役を務める。(……)

2004年バイロイト音楽祭『パルジファル』の意表をつく演出では大きな物議を醸す。以降オペラ演出家としても活躍。

2008年に肺癌と診断され、片肺摘出。以降自らの闘病と死をテーマに演劇・オペラ作品を展開すると同時に、アフリカのブルキナファソで「アフリカ・オペラ村」建設を計画、建築に着工。

2010年8月21日、49歳で他界⁵⁾。

「一家は敬虔なカソリック教徒で子供時代は教会の堂役を務める」という点、2004年のバイロイト音楽祭での『パルジファル』演出、2008年の肺癌宣告と「アフリカ・オペラ村」の着工、という点が本稿と直接関連する文章である。上記の上映会では『メア・クルバ (我が贖罪)』が上映され、出演者の一人で他のシュリンゲンジーフ作品にも出演してきた原サチコ氏がゲストスピーチを行っている。その際の作品解説文の中では『メア・クルバ (我が贖罪)』が、下記のようにシュリンゲンジーフの「集大成」として紹介されている。

今回上映する『メア・クルバ (我が贖罪)』(120分)は、2008年にシュリンゲンジーフが肺癌に罹っていることを公表した後、2009年にウィーンのブルク劇場で制作されたもので、愛、死、赦しをテーマに取り組んだ3幕のレディメイド・オペラ。パルシファル、療養サナトリウム、アフリカ・オペラ村建設計画、キリスト教、家族友人との別れ……芝居と映像の多層的ラビリンスを100人以上のキャストで実現

5) https://www.goethe.de/ins/jp/ja/ver.cfm?event_id=20788307 および <http://www.cinenouveau.com/sakuhin/schlingensief/schlingensief.html>。

し、彼の死後もウィーンの他、ミュンヘン、ハンブルク、アムステルダムと招聘され絶賛された彼の集大成ともいえる舞台作品です⁶⁾。

『メア・クルパ (我が贖罪)』は「愛, 死, 赦しをテーマに取り組んだ」, 「芝居と映像の多層的ラビリンス」と説明されてはいるものの、その前年に制作された『不安の教会』に比べてストーリー展開がより明確となり、宗教性もより強くなっている。筆者が調べた限りでは『メア・クルパ (我が贖罪)』の日本における上映会はこの1回限りである。また『不安の教会』の日本での上映記録は確認できない。それに対してドイツにおける『不安の教会』の批評記事は実に多い。

ドイツにおけるシュリンゲンジーフ紹介記事の代表は、彼の遺作を管理・紹介するために開設されたサイト <https://www.schlingensief.com> である。このサイトでは幼年時代から逝去に至るまでの経歴が簡潔に紹介されている。その中から本稿に関わる最晩年の紹介記事を下記に引用する。

Seine Themen kreisen beständig um die Frage nach Gott, der Erlösung und dem Sinn aller Kunst. Die Verschiebung seiner Bilder und Gedanken durch seine Krebserkrankung bearbeitete er offensiv in seiner Inszenierung *Der Zwischenstand der Dinge* am Maxim-Gorki-Theater (2008), seinem 2009 im Rahmen der Ruhrtriennale uraufgeführtem Fluxusoratorium *Kirche der Angst vor dem Fremden in mir*, der ReadyMade-Oper *Mea Culpa* am Wiener Burgtheater und zuletzt in Koproduktion mit dem Züricher Neumarkttheater und dem Schauspielhaus Zürich mit *Sterben lernen Herr Andersen stirbt in 60 Minuten*. Große Aufmerksamkeit erfuhr auch sein 2009 bei Kiepenheuer erschienener Bestseller *So schön wie hier kann es im Himmel gar nicht sein!*

6) https://www.goethe.de/ins/jp/ja/ver.cfm?fuseaction=events.detail&event_id=20757352

*Tagebuch einer Krebserkrankung.*⁷⁾

彼のテーマは常に、神、贖罪・救済⁸⁾、そしてすべての芸術の意味をめぐる問題である。2008年のマキシム・ゴーリキ劇場での『中間結果』(Der Zwischenstand der Dinge)、2009年のルール・トリエンナーレで初演されたフルクサス・オラトリオ『私の中の異物に対する不安の教会』、ウィーンのパルク劇場でのレディメイド・オペラ『メア・クルバ (我が贖罪)』、最近ではチューリッヒのノイマルクト劇場と州立劇場との共同制作「死ぬことを学ぶ アンデルセン氏は60分以内に死ぬ」で、癌による自分のイメージや思考の変化を攻撃的に扱っている。2009年にキーペンホイヤー社から出版された彼のベストセラー『天国ではここほど素晴らしくはあり得ない! がん闘病日記』は大きな注目を集めた。

この紹介文は最晩年の二つのパフォーマンス作品を大きく取り上げ、シュリンゲンジーフが終生「神、贖罪、芸術の意味」を問い続けたことを強調している。ただこの文章には「神、贖罪」というテーマが癌宣告を受けてから大きく取り上げられた問いであることを曖昧にしている。それ以前に彼が主に取り組んだのは、『オーストリアを愛してね!』(Bitte, liebt Österreich! 2000年)⁹⁾に代表されるアクション制作によって、「文化的・政治的言説に介入」する可能性の探求だったからである。

7) https://www.schlingensief.com/index_ger.html

8) 本稿ではErlösungの訳語として贖罪・救済を当てる。シュリンゲンジーフのアクション『メア・クルバ (我が贖罪)』は救済と贖罪の二つを主要なテーマとし、ゲーテ・インスティテュートの紹介文では贖罪という訳語が与えられているからである。

9) 『オーストリアを愛してね!』(Bitte, liebt Österreich! はアクションのタイトル。それを記録したドキュメンタリー映画のタイトルは『外国人よ、出て行け! シュリンゲンジーフのコンテナ』(Ausländer raus! Schlingensiefs Container)

II-2. 『不安の教会』の成立背景とドイツでの受容

『不安の教会』の成立背景に関するインタビュー記事、批評記事や報道番組のリンクは schlingensief.com の「PRESSESPIEGEL “EINE KIRCHE DER ANGST VOR DEM FREMDEN IN MIR” (10/2008)」¹⁰⁾ に 16 本掲載されている。その中のインタビュー記事の下記の文章を参照しながら、癌宣告を受けた 2008 年当時のシュリングエンジーフがキリスト教、神、芸術についてどのような見解を有していたのかを検証したい。

① Dabei entstanden Fragen wie „Mein Gott, warum hast Du mich verlassen?“ oder „Hast Du mich wirklich verlassen?“, „Will Gott mich richten? Aber wer ist Gott?“, „Bin ich ein Teil Gottes, der Teil, der sterben kann?“.¹¹⁾

その際に生まれたのが次のような問いです——「神よ、なぜ私をお見捨てになったのですか?」、「あなたは本当に私をお見捨てになったのですか?」、「神は私を裁きたいのだろうか?」、「しかし、神とは誰なのだろうか?」、「私は神の一部なのだろうか、死ぬことがありうるような一部分なのだろうか?」。

② Ich bin zutiefst verletzt in meinem Gottvertrauen, in meiner Liebe zum Leben, zur Natur – zu alldem bricht aus mir eine große Wut, eine große Bösartigkeit aus. Vielleicht hab ich die immer in mir getragen.

神に対する私の信頼、生命への、自然への私の愛について私は深く傷ついています。すべてに対して、私の中から大きな怒り、大きな悪意

である。オーストリアの極右政党である自由党の連立政権参加、自由党が唱える外国移民排斥政策を批判的に取り上げたアクションであり、ウィーン市民を巻き込んだ賛否両論や政治的デモをも喚起した。『外国人よ、出て行け!』は <https://www.dailymotion.com/video/x8iaej> でも視聴可能である。(2023 年 9 月現在)

10) <https://www.schlingensief.com/pressestimmen.php?id=t040>

11) Der Standard vom 01.Oktober 2008. <https://www.schlingensief.com/weblog/?p=290>

が噴き出してきます。おそらく、私はいつもこうした感情を内に秘めていたのでしょう¹²⁾。

③ Ich bin Katholik und glaube an ein Leben nach dem Tod. (...)

Die Methoden sind eingeübt und abgebrüht. Meine Kirche dagegen ist persönlich, sie will nicht in Rituale flüchten, sie will Gott in sich entdecken. Sie will die Autonomie fördern, um auch in größter Not zu sich stehen zu können und nicht immer zu müssen!¹³⁾

私はカトリック教徒であり、死後の生命を信じています。

(教会の：筆者註) その方法は訓練の成果であり、硬直化しています。他方、私の教会は個人的なものであり、儀式に逃げ込むことを望んでいません。それは自律性を促し、最も困難な時であっても自分自身で立つことができるようにしますが、常にそうする必要はあるわけではないのです！

④ Man sucht als Christ und erst recht als Katholik die Schuld doch zuerst bei sich selbst, Krankheit als Bestrafung. (...)

Ich bin als Christ erzogen worden, aber Gott und auch Jesus waren mir immer wieder fremd, und die Kirche viel zu seicht, viel zu weinerlich, ein Riesenproblem. (...)

Man sucht als Christ und erst recht als Katholik die Schuld doch zuerst bei sich selbst, Krankheit als Bestrafung. (...)

Vielleicht ist Gott doch ein gescheiterter Künstler. Wenn ich jetzt etwas länger hinschaue, Gefühle nicht mehr nur oberflächlich abperlen lasse, dann frage ich mich, ob ein Schöpfer wie Gott als Künstler versagt hat. Sein Werk ist unvollkommen, es gammelt vor sich hin. Gott hat aufgegeben. Er will

12) SZ Magazin vom 20.09.2008. <https://www.schlingensief.com/weblog/?p=285>

13) Berliner Zeitung vom 11. September 2008. <https://www.schlingensief.com/weblog/?p=282>

nicht mehr korrigieren. Die Kunst aber akzeptiert das Scheitern, und genau da hilft sie Gott.¹⁴⁾

キリスト教徒として、そしてカトリック教徒としてはなおさら、まず自分自身に罪を求めるものですし、病気を罰として捉えます。(……) 私はキリスト教徒として育ちましたが、神やイエスもいつも私にとっ
てずっと異質な存在でした。(……)

神は、もしかすると失敗した芸術家なのかもしれません。私が表面的な感情にもはや流されることなく、もう少し長い目で見てみると、神のような創造主は芸術家として失敗したのではないだろうか、と自問します。彼の作品は不完全で、朽ち果てようとしています。神は諦めてしまったのです。もはや修正しようとはしていません。しかし、芸術は失敗を受け入れ、まさにその点において神の助けとなるのです。

⑤ Kirche, Angst, das Fremde: Diese Themen haben für mich eine extreme Bedeutung bekommen – und nichts mit Propaganda zu tun. Ich erlebe die Beziehung zu meinem Gott als Kampfsituation. Wenn man einen solchen Schlag abkriegt, kann man das nicht einfach akzeptieren. Anfang des Jahres bekam ich die Krebsdiagnose, seither quält mich die Frage, wer mich da verlassen hat. „Mein Gott, warum hast du mich verlassen“ – den Satz kann ich nun auch mal rufen. Vielleicht habe auch ich Gott verlassen, vorher schon.(…)

Ein immer wiederkehrender Gedanke: Was ist jetzt mit Gott? Wie bekomme ich Kontakt? Wieso komme ich mir schlecht vor und fühle mich schuldig?
(…)

Ich komme immer wieder auf Joseph Beuys zurück, der sagte: Erst als Jesus verlassen war, fing die Ich-Erkenntnis an. Und so etwas empfinde ich jetzt

14) Deutsche Presse-Agentur, vom 6. September 2008. <https://www.schlingensief.com/weblog/?p=280>

auch. Bevor ich gehe, möchte ich erfahren, was mit Gott los ist.¹⁵⁾

教会、不安、異質なもの……これらのテーマは私にとって極端に大きな意味を持つようになりました——自己宣伝とは何の関係もありません。私は自分の神との関係を戦いの状況として経験しています。今回のような打撃を受けると、それをただ受け入れるわけにはいかないのです。今年の初めに癌と診断されて以来、私を見捨てたのは誰なのか、という疑問に苛まれています。「我が神よ、なぜ私をお見捨てになつたのですか」——このセリフを私は今や繰り返すことができるのです。もしかしたら私の方も以前から神を見捨てていたのかもしれませんが。繰り返しこう思案します——「今や神とどうしたらよいのだろうか?」、「どうやって連絡を取ればいいのだろうか?」、「なぜ私は自分が悪いんだというような気持ちになり、かつ罪悪感を持つのだろうか?」

私はいつもヨーゼフ・ボイスの「イエスが神から捨てられたときに初めて、その自己認識が始まった」という言葉に立ち戻ります。そして今、私はそう感じています。死ぬ前に、神はいったいどうしたのだろうか、ということを知りたいのです。

上記のインタビューからは以下の点が確認できる。

- 1) シュリンゲンジーフはカトリック教徒であり、死後の生命を信じていること。
- 2) 敬虔なカトリック教徒ではなく、神を異質なものと感じてきたこと。
- 3) 突然の癌宣告を受けて大きな怒りを感じるとともに、神から見捨てられた気持ちになったこと。
- 4) 自分自身が神を見捨てたとも感じ、癌宣告を神による罰としても捉えていること。

15) Der Tagesspiegel vom 10.09.2008. <https://www.schlingensief.com/weblog/?p=281>

- 5) 公的制度としての教会には不信感を持ち、自分自身の教会を築こうとしていること。
- 6) 『不安の教会』はシュリンゲンジーフ個人のための教会であること。
- 7) 『不安の教会』は、癌宣告という大きな苦難に直面しても自律性を失わない可能性を提示するアクションであること。
- 8) 失敗を認め修正する力を有する芸術によって、神の失敗作であるこの世界をも修正し、神の助けになる可能性を探ろうとしていること。
- 9) 癌宣告という神から見捨てられた体験を通して、ヨーゼフ・ボイスに倣い新たな自己認識を得ようとしていること。

カトリック教と神に対するシュリンゲンジーフの見解は時には首尾一貫性を欠き、揺れている。それを敢えて要約すれば「カトリック教の神への信仰を捨てたわけではないものの、自分に癌という罰をもたらした神を信じ切れずに怒りさえ抱き、神と自分との関係をアクションという芸術行為を通して再検証しようとしている」ということができるであろう。神と芸術との関係について特徴的なのは、シュリンゲンジーフが「芸術は宗教を補完し得る」また「芸術家は神の助けとなる」という相互補完性を確認しようとしている点である。癌宣告を受けて死と直面することによって、芸術家としての彼は初めてアクション行為を通して神と正面から向き合う必要性に迫られたことが分かる。

次にシュリンゲンジーフが癌罹患とワーグナーのオペラ『バルジファル』演出（バイロイト演劇祭 2004年）との関係をどのように捉えていたかを、下記のインタビューから検証したい。

⑥ Ich glaube, dass ich mir in der Zeit von Bayreuth das Weltabschiedswerk von Herrn Richard Wagner, zusammen mit der Kritik von Nietzsche, so zu Herzen genommen habe, dass es zu viel wurde. Ich habe den Tod, das

Abschiedswerk, das „zum letzten Mal“, „zum Raum wird hier die Zeit“, vielleicht zu ernst genommen. (...)

Ich habe dieses Weltabschiedswerk in Bayreuth näher an mich herangelassen, als es mir zuträglich war. Man braucht dafür, wie man oft hören kann, eine gewisse Reife. Die hatte ich nicht. Ich hatte auch keinen Schutzpanzer, keine eingeübte Professionalität, im Umgang mit der Oper, ich hatte sozusagen ungeschützten Verkehr mit diesem Werk. (...)

Aber dass wir uns richtig verstehen, es war nicht der „Parsifal“, der den Krebs erzeugt hat, sondern aus Angst habe ich damals Dinge getan, die ich mir bis heute vorwerfe. Ich habe teilweise auf Kosten anderer Menschen gelebt und ich habe mich, einfach gesagt, damals nicht lieb genug gehabt. Das hat mich in einen Zustand permanenter Angst versetzt.¹⁶⁾

バイロイトでの演出のころ、私はリヒャルト・ワーグナーの生涯最後の作品を、ニーチェの批評をも交えて真摯に受け止めたのですが、それが行き過ぎたのだと思います。死、生涯最後の作品、「最後の時に」、「時間がここでは空間となる」ということを重く受け止めすぎたのかもしれない。(……)

バイロイトでは、この生涯最後の作品を有益となる以上に自分自身に引き寄せてしまいました。よく耳にするように、そのためにはある種の成熟が必要なのです。私にはそれがありませんでした。オペラを扱ううえでの防護の鎧もなく、訓練を積んだうえでの専門性もないまま、いわば無防備にこの作品を演出してしまったのです。(……)

しかし、はっきりさせておきたいのは、『パルジファル』が癌の原因ではないということです。そうではなくて、不安に駆られて私が犯し

16) Frankfurter Rundschau vom 13.09.2008. <https://www.schlingensief.com/weblog/?p=283> 尚 „zum letzten Mal“ と „zum Raum wird hier die Zeit“, は『パルジファル』の歌詞の一部。

てしまったことがあり、それを今でも悔いています。他人の犠牲のう
えに生きていた面もありますし、簡単に言えば、当時の私は自分自身
を十分に愛していませんでした。そのせいで、私はいつまでも不安の
中にいたのです。

⑦ Die andauernde Beschäftigung über Jahre mit dieser Todesnähe im
Parsifal-Stoff, das wurde fast zu viel. Wenn man permanent auf eine Stelle
haut, dann wird sie wund und bricht irgendwann mal auf. Ich habe mir in den
Jahren in Bayreuth, als der Krebs schon zu wachsen begann, ein paar Dinge
erlaubt, die nicht zu meinem Naturell gehören. Dagegen lehnt sich auch der
Körper auf. Man fährt wahrscheinlich sehr oft nach Bayreuth nicht um zu
leben, sondern um zu sterben. Es gibt ja Dirigenten, die keinen „Tristan“
dirigieren wollen, weil sie meinen, dass sie danach sterben würden. Ich
würde diese Oper gerne inszenieren. Und nicht um zu sterben, sondern um
der Liebe ein Denkmal zu setzen! Und um zu sehen wie weit man in der
Kunst bei lebendigem Leibe kommen kann.¹⁷⁾

パルジファルという作品における死への近さについて、何年にもわ
たって絶え間ないこだわりがありました。これがほとんど過剰となっ
てしまいました。一か所を叩き続けると痛んで、いつかは割れてしま
う。バイロイトでの数年間、すでに癌が大きくなり始めていた頃、私
は自分の本性に合わないことをいくつか敢えてしてしまいました。身
体もそれに反発しました。バイロイトには生きるためではなく、死ぬ
ために行くことが多いのでしょう。『トリスタン』を指揮したくない
という指揮者もいます。私はこのオペラを指揮してみたいのです。死
ぬためにではなく、愛への記念碑を建てるために！そして、生きて
いる間に芸術の中でどのくらい遠くまで到達できるかを見るための

17) Deutsche Presse Agentur vom 06.09.2008.

です。

これらの発言から、シュリンゲンジーフが癌罹患と『パルジファル』演出の関連について次のように考えていたことが分かる。

- 1) 「死への近さ」をもテーマとするワーグナー「生涯最後の作品」である『パルジファル』演出に真摯に取り組み過ぎた結果として、自分自身の死を招き寄せてしまったと考えていること。
- 2) 『パルジファル』演出のために必要な成熟と訓練を欠いたまま演出作業に取り組んだために不安を抱えており、それが癌罹患につながったと考えていること。
- 3) 不安に駆られて他のスタッフを犠牲にすることもあり、そのことが自己嫌悪につながった結果として癌に罹患したと考えていること。
- 4) バイロイト音楽祭で『トリスタンとイゾルデ』を演出することによって、「愛への記念碑」を建てるとともに、「生きている間に芸術の中でどこまで到達できるか」を見極めたいと願っていること。

『不安の教会』の中で『パルジファル』の一部が引用されることの多い理由が、上記のインタビューから推測可能となる。このようにバイロイト音楽祭での演出経験を反省材料としながらシュリンゲンジーフは『不安の教会』の中で、「死への近さ」に直面するアルフォンタスのシーンを引用・改変することによってワーグナーの祝典劇とは異なる死生観と宗教観を提示することになる。

次に『不安の教会』への観客の反応と新聞批評について検証したい。この点に関してはシュリンゲンジーフがインタビューで以下のように語っている。

⑧ Die Arbeit ist aufrichtig, ehrlich, berührend. Sowohl die Besucher, als

auch die Kritik haben nicht nur positiv, sondern vor allem sehr offen reagiert! Es geht hier nicht nur um meine Leidensgeschichte, sondern um die schonungslose Offenheit über die Ängste und die Fragen, die sich einem stellen, zu begegnen. Die Leute kamen nach der Vorstellung zu mir und wollten reden, zum Beispiel, weil ihr Kind an Krebs erkrankt ist. Es sind Fragen, wie jene, warum soviel Leid in dieser großartigen Schöpfung sein muss. Es geht auch um den Wert des Inaktiven neben dem Aktiven, die verschiedenen Leiber, die es von Gott geben kann. Ich glaube, dieser Abend hat viele neue Dinge eröffnet, über die man noch viel arbeiten muss! Und wie es jetzt aussieht, wird der Abend wohl demnächst wieder aufgeführt, auch in anderen Ländern, vielleicht auch in Österreich.¹⁸⁾

この作品は誠実で、正直で、心に触れるものです。来場者も批評家も好意的な反応を示してくれただけでなく、何よりも非常に率直に応じてくれました！これは、私の苦悩の物語についてだけでなく、人々が直面する不安や疑問について余すところなくオープンにすることでもあります。公演後に私のところに来て、話をしたいと言う人がいました。例えば、自分の子供が癌になったという理由からです。この偉大な創造物の中で、なぜこれほどの苦しみがなければならないのかというような質問です。それはまた、活動的なものと並ぶ非活動的なものの有する価値、神から与えられる可能性のあるさまざまな身体の価値についてもです。この上演の夕べは、取り組むべき多くの新しいことを切り拓いたと思います！そして、この上演の夕べはおそらく近いうちに他の国でも、もしかしたらオーストリアでも再演されるかもしれません。

18) Der Standard vom 01. Oktober 2008.

この発言を裏書きするように、ドイツの有力紙と演劇批評専門サイトの評価は総体的にみると下記のように好意的である。

⑨ Im Lauf des Abends begreift man seine Aktion immer weniger als den Akt eines wahnwitzigen Narzissten, der in unseren Blicken baden will. Man kommt dahin, Schlingensiefs Aktion auch als Akt der Großzügigkeit zu begreifen: Ein Mann vergesellschaftet seine Angst; er stellt sie uns wie einen Überschuss an Wärme zur Verfügung.¹⁹⁾

上演の夕べが進行してゆくにつれ彼のアクション作品が、私たちの視線を浴びようと欲する狂気のナルシストの行為ではないことを、次第に理解するようになる。ある男が自分の不安を社会化し、その不安を温もりがあふれてくるように私たちに提供している。

⑩ Doch Schlingensiefs Weltbild ist auch eine Kunstreligion. Sein ganzes Leben lang hat er immer wieder gefragt: Was haben die Klassiker uns heute noch zu sagen? Nur dachte er dabei an andere Klassiker als Peter Stein: An die Kirchenväter der modernen Entgrenzungskunst. An Beuys, an die Fluxus-Bewegung, an die Wiener Aktionisten (deren Schock-und-Ekel-Performances er allerdings schon lange nicht mehr zitiert, als wäre er milde geworden) und manchmal auch an Rudi Dutschke.²⁰⁾

しかし、シュリンゲンジーフの世界観は芸術宗教でもある。シュリンゲンジーフは生涯を通じて、「古典は現代に生きる私たちに何を語りかけているのだろうか」と問い続けてきた。ただし彼はその際に、ペーター・シュタインとは異なる古典について考えていた。つまりボイス、フルクサス運動、ウィーン・アクションイズムの人々（衝撃と嫌悪を喚起するそのパフォーマンスを引用することを彼はぜひぶん前にやめた

19) Die ZEIT vom 25.09.2008. <https://www.schlingensief.com/weblog/?p=293>

20) Die Welt vom 22.09.2008. <https://www.schlingensief.com/weblog/?p=292>

が、まるで温和になったかのようだ), そして時にはルディ・ドゥチュケについて考えていたのである。

⑪ Mit seiner gesamten Existenz hat er sich in diese Produktion geworfen. Sie ist ein radikaler Lebensbeweis. Eine Selbstmitleidsorgie – und doch weht in den Schlingensief'schen Zeremonien ein Geist der Bejahung. Hier spricht einer vom Kranksein und vom Sterben, aber es ist kein Arzt, kein Seelsorger, kein Psychologe; keiner mit einem trainierten Vokabular. Schlingensief tröstet nicht, belehrt nicht. Er reckt die Faust.²¹⁾

彼は全存在をかけてこの作品制作に身を投じたのである。この作品は生きていることのラディカルな証明である。自己憐憫の饗宴ではあるものの、シュリンゲンジーフのこの儀式には肯定の精神が漂っている。ここでは誰かが病と死について語るが、それは医者でも牧師でも心理学者でもなく、訓練された語彙を持つ者でもない。シュリンゲンジーフは慰めるでもなく、説教するでもない。彼は拳を振り上げるのだ。

⑫ Und so vereint der Abend auf eigenartige Weise alle Gegensätze: er ist eine blasphemische Gottessuche, ein ketzerisches und ebenso tiefgläubiges Ritual. Schlingensief hat sich selbst im wahrsten Sinne des Wortes aufs Spiel gesetzt und macht der Welt damit tatsächlich eine Art Geschenk. Man wird das nicht vergessen können.²²⁾

このようにして上演の夕べは、すべての相反するものを奇妙な形で結びつける：この上演は神を冒瀆するような探求であり、異端的でありながら同様に深い信仰の儀式でもある。(……) シュリンゲンジーフは、本当の意味で自らを危険にさらし、そうすることで実は世界に一種の贈り物をしたのだ。この贈り物を忘れることはできないだろう。

21) Der Tagesspiegel vom 10.09.2008.

22) nachtkritik.de vom 21.09.2008. <https://www.schlingensief.com/weblog/?p=298>

こうした劇評にみられるように、『不安の教会』は「芸術宗教」作品とも捉えられ、死に直面した芸術家の「生と死」をめぐる自問としてだけでなく、社会的問いの提示としても評価されたのである。

II-3. 『不安の教会』の先行研究

『不安の教会』に関する論文は日本では現在のところ発表されていない。本稿のテーマに関する先行研究としては、シュリンゲンジーフ演出『パルジファル』をポストドラマ演劇との関連で論じた下記の論文がある。

北川 千香子：オペラにおける「ポストドラマ性」（演劇学論集，日本演劇学会紀要 67，2019）

ハンス＝ティース・レーマンのポストドラマ演劇の理論²³⁾に依拠しながら、北川氏はシュリンゲンジーフ演出『パルジファル』の特徴を以下のように「超過 *Überschreitung*」であり、「過剰と極端への傾向」が強いと指摘している。

シュリンゲンジーフの《パルジファル》演出におけるポストドラマ的美学の特徴は「超過 *Überschreitung*」に集約されるだろう。それは決して形而上学的な意味ではなく、さまざまな手段を用いて既存の枠組みを越えていこうとすることである。（中略）シュリンゲンジーフの美的コンセプトが語られる際、「肥大 *Hypertrophie*」, 「ハイパーテキスト性 *Hypertextualität*」, 「ハイパーメディア性 *Hypermedialität*」, 「過剰 *Übermaß*」, 「観客に対する過大な要求 *Überforderung*」といった表現が用いられることが多い。（北川 43 頁）

こうした特徴は『不安の教会』にも共通しているが、このアクション作

23) ハンス＝ティース・レーマン：『ポストドラマ演劇』，谷川道子／新野守広／本田雅也／三輪玲子／四ツ谷亮子／平田栄一朗訳，同学社，2002年。

品では複数の文章、画像、音声を「オーバーラップ Überblendung」する手法を用いながら生と死の境界を「超過 Überschreitung」する試みがなされているとみることができる。ただ『パルジファル』演出とは異なり、『不安の教会』では「無秩序で非連続的なコラージュ性」²⁴⁾は緩和されて、「生から死への変容を肯定することは可能か」、「死と再生の可能性を信じることは可能か」という生と死をめぐる問いを観客に投げかけていることは明らかである。

ドイツ語圏ではシュリンゲンジーフ研究の基盤が整備されてきている。2024年には『シュリンゲンジーフ・ハンドブック』²⁵⁾が刊行予定であり、今後のシュリンゲンジーフ研究は国際的に拡大してゆくことが予想される。筆者は『不安の教会』に関するドイツ語圏内外の研究状況全体をカバーするには至っていないので、まずはこのハンドブックの刊行を待ちたい。本稿で参照するドイツ語圏の主な研究書は下記の通りである。

Johanna Zorn: Sterben lernen: Christoph Schlingensiefels autobiotheatrale Selbstmodellierung im Angesicht des Todes (Forum Modernes Theater 49), Narr Francke Attempto Verlag (September 11, 2017)

この研究書はミュンヘン大学演劇研究所に提出された博士論文であり、『不安の教会』、『メア・クルパ (我が贖罪)』の他にチューリッヒ州立劇場との共同制作『死に方を学ぶ』(STERBEN LERNEN (HERR ANDERSEN STIRBT IN 60 MIN. 2019)に関する論考を含んでいる。本稿ではこの研究書の『不安の教会』に関する記述を参照しながら論述を進める。

24) 北川 45頁。

25) Teresa Kovacs, Peter Scheinpflug (hrsg): Schlingensiefel-Handbuch: Leben – Werk – Wirkung Hardcover, J.B. Metzler – June 8, 2024.

Ⅲ. 『不安の教会』における芸術ジャンルおよび引用テキストのオーバーラップ

『不安の教会』は「フルクサス・オラトリオ」と名付けられているので、まず「フルクサス」と「オラトリオ」の一般的な意味を確認したい。『日本大百科全書』（平凡社 ジャパンナレッジ Lib）の「フルクサス Fluxus」の項目では次のように解説している。

1960年代に、ハプニングを表現形態として活動を行った国際的な芸術家のグループ。名称はラテン語に基づき〈流体の〉〈崩壊途上の〉などの意。その前史として、作曲家J. ケージを中心に1950年代アメリカで見られたハプニングの原型をなす催しがある。(……)〈きまじめな芸術とその諸制度、ヨーロッパ中心主義、芸術の専門性とエゴに反対する〉立場を取り、美術およびその周辺領域（音楽、演劇、文学、新しい諸メディア等）にまたがる多様なハプニングを行い、1950年代後半以降のネオ・ダダ的な芸術運動の一つの中心をなした。マチューナス G.Maciunas、ブレクト G.Brecht らを中心メンバーとし、他にヒギンズ D.Higgins、ノールズ A.Knowles、ワッツ R.Watts、ラ・モンテ・ヤング La Monte Young、パイク N.J.Paik、日本の巖嘔（あいおう）、小野洋子、久保田成子、小杉武久らがいる。 [千葉 成夫]

『不安の教会』の特徴として、様々な引用文、映像、音楽の断片が揺れ動く〈流体〉として提示され、観客による特定の意味づけ行為が〈崩壊途上〉に晒される点が挙げられる。冒頭にはジョージ・ブレクトの『出口への入口』（George Brecht - Entrance to Exit 1965）²⁶⁾ がスクリーン上に投射され、「生からの出口、すなわち死の入り口」に関するアクション作品であ

26) この映像作品は現在 YouTube で視聴することができる。 <https://www.youtube.com/watch?v=Y0muWXsqYW8>

ることがまず提示される。

「オラトリオ oratorio」については『日本大百科全書』は次のように解説している。

〈祈禱所〉の意。音楽用語としては、宗教的または道徳的内容を持つ劇的な物語を独唱、合唱、管弦楽のために作曲した作品をさす。厳格な典礼音楽に対する、自由な祈りの音楽の名称として用いられたらしい。

この記述を踏まえるとシュリンゲンジーフは『不安の教会』を、自分自身を含む演者と観客による〈祈禱所〉として設定し、参加者全員による祈りの音楽劇作品として企画したことが分かる。

次に『不安の教会』の引用テキストを検証することによって、シュリンゲンジーフの制作意図を明らかにしたい。このアクション作品の中で引用されている映像、文章に関する一次資料として現在入手可能なのは公演のDVDと付属の公演パンフレットである。

Original Leporello der Ruhrtriennale 2008²⁷⁾

Zornによれば未刊行の下記の資料がある。

Christoph Schlingensief: Regiebuch zu “Eine Kirche der Angst vor dem Fremden in mir”. Stand: Generalprobe am 20.09, 2008²⁸⁾

本稿では映像分析を踏まえながらも、引用文献の検証を主に進めてゆく。公演パンフレットの表紙にはボイスの言葉「傷を見せる者は癒される (Wer seine Wunde zeigt, wird geheilt“ とともに左肺を削除した写真を中央の丸窓

27) この公演パンフレットはDVD発売会社 filmgalerie451 のサイトで閲覧可能である。 <https://www.filmgalerie451.de/de/filme/eine-kirche-der-angst-vor-dem-fremden-in-mir>

28) Zorn, a.a.O. S.268.

に挿入した教会ミサ用の用具の図像が描かれている。またプログラム冒頭にもボイスの文章が次のように掲げられている。

Ja, zeig mal deine Wunde! Wer seine Wunden zeigt, wird geheilt. Wer sie verbirgt, wird nicht geheilt. Joseph Beuys	そう、まず傷を見せろ！ 傷を見せる者は癒される。 それを隠す者は癒されない。 ヨーゼフ・ボイス
---	--

シュリゲンジーフはこの言葉をパラフレーズし、パンフレットの初めに掲げるとともに、『不安の教会』のミサを執り行う司祭として舞台上から観客に次のように語りかける。

„Wer seine Wunden zeigt, wird geheilt, wer seine Wunden verbirgt, wird nicht geheilt. Wir gedenken dem zukünftig Verstorbenen, der Vieles leisten wollte, kaum, dass er schon wieder weg war...ein Mensch wie wir, wie du, wie ich, wir alle...und damit auch besonders. Er war der, der er war, mehr nicht, aber immerhin, wer kann das schon von sich sagen. Viele sind tot. Viele sind untot. Uns hat man jedenfalls noch nicht beerdigt. Und alle: Uns hat man jedenfalls noch nicht beerdigt. Hallelulja. Hallelulja.“

傷を見せる者は癒され、傷を隠す者は癒されない。私たちはこれから亡くなる人を追悼する。彼は多くのことを成し遂げようとした。彼が再度いなくなってからすぐに追悼する。彼は私たち、あなた、私のような、私たちみんなのような人でした……そしてそれゆえに特別な人。彼はかつて存在した人であり、それ以上の何者でもありません。死んだ者も多く、死んでいない者も多い。いずれにせよ、私たちはまだ埋葬されていない。そしてみなさん——何はともあれ、我々はまだ埋葬されていない。まだ埋葬されていない。ハレルヤ。ハレルヤ。

この文章が『不安の教会』を企画したシュリンゲンジーフの意図と願望を反映したものであることは明らかである。つまり彼は癌宣告を受けて苦悩する自分の姿を「フルクサス・オラトリオ」というアクション作品を通して観衆に示すことによって、癌からの回復を期待したのである。以上を確認したうえで公演パンフレットに記載されている文章を順番に列挙する。またドイツ語原文の一部を記載する。引用文の出典についてはパンフレット記載のものを踏襲する。

① 表紙：ミサ全体の宣言文

ボイスの傷を見せる行為による治癒の力への期待をシュリンゲンジーフは示す。

Wer seine Wunde zeigt wird geheilt.

傷を見せる者は癒される。

② 裏表紙：ハインリッヒ・クライストの戯曲『ホンブルクの公子』(Heinrich von Kleist aus Der Prinz von Homburg) 四幕第三場冒頭のホンブルクのセリフから引用

ホンブルクは、人生を此岸と彼岸の間を移動する旅にたとえるイスラム僧の宗教観を引きながら、彼岸の素晴らしさを肯定して死を受けいれようともしている。しかし此岸と彼岸の間に同時に住みたいという願望を吐露する。この文章が裏表紙に掲げられたことから、これがシュリンゲンジーフの願望とも重なることを提示している。

Das Leben nennt der Derwisch eine Reise, / Und eine kurze. Freilich! Von zwei Spannen / Diesseits der Erde nach zwei Spannen drunter. / Ich will auf halbem Weg mich niederlassen! / Wer heut sein Haupt noch auf der Schulter trägt, / Hängt es schon morgen zitternd auf den Leib, / Und übermorgen liegts bei seiner Ferse. / Zwar, eine Sonne, sagt man, scheint dort auch, / Und über buntre Felder noch, als hier: / Ich glaub's; nur schade, daß das Auge modert, / Das diese Herrlichkeit erblicken soll.

イスラム教の修行僧は人生を旅と呼ぶ。短い旅だ。もちろんだ！ ふたつの領域を巡る旅だ。ふたつの領域に沿って言えば、この世の此岸は下の方だ。私はこれらの領域の間に居を定めたい！ 今日、まだ頭を肩の上に持つ者は、明日にはもうその頭を体からぶら下げている、明後日はその頭はかかとの傍に横たわる。太陽はそこでも輝いている、しかもここ以上に色鮮やかな草原の上に。確かに人はそう言うだろう。私もそれを信じる。ただ惜しむらくは、この栄光を見るべき眼がかすんでいくことだ。

③ 典礼断片 LITURGIE-FRAGMENTE

シュリンゲンジーフの言葉の引用^{註1)} 1

ボイスの『傷を見せる者は癒される』を踏まえたシュリンゲンジーフによるパラフレーズ。これから「これから亡くなる人」への追悼（上記参照）

④ シュリンゲンジーフの言葉の引用 2

癌宣告を受けて考えた自殺の可能性と不可能性についての苦悩を綴ったのちにすべてたわごと（Quatsch）と語る。

Ich werd die Entscheidung treffen müssen, ob ich mir in den Kopf schieße, hab keine Pistole, ob ich in die Badewanne steige und mach mir einfach die Adern auf oder ob ich irgendwie aus'm Fenster falle, dazu ist es hier nicht hoch genug.

(...)

Ich bin nicht mehr der, der ich bin. Bin nicht der, der ich war. Ich bin nicht der, der ich werden wollte. Alles Quatsch!

頭を撃ち抜くか、浴槽に入って血管をただ切り開くか、その決断をしなければならぬ。あるいは窓からでも飛び降りるのだが、そのためにはこの高さは十分とは言えない。

(…)

私はもう私ではない。以前の私ではない。なりたかった自分でもない。全部たわごとだ！

⑤ 日々の祈り Tagesgebet

制度としての教会のみならず、教会が唱える神の存在を否定する祈り。

Jesus ist trotzdem nicht da.

Und Gott ist auch nicht da.

Und die Mutter Maria ist auch nicht da.

Es ist alles ganz tot.

Uns es ist alles ganz kalt.

それにもかかわらずイエスはいない。

そして主もまたいない。

聖母マリアもいない。

すべては完全に死んでいる。

そしてすべてが完全に冷たい。

⑥ シュリンゲンジーフの言葉の引用 3

「これまでの人生では善行を積んできた」という自己意識の表明

Ich hab es eigentlich immer gut gemeint, ich habe immer nur

Gutes gewollt. Ich hab es nicht böse gemeint.

私はそもそも常に良かれと思ってきた。いつも良いことを欲してきた。悪さをするつもりはなかった。

⑦ シュリンゲンジーフの言葉の引用 4

入院中の寄り辺なさと孤独を語る。

Der Draht ist irgendwie weg. Ich habe keinen Kontakt. Ich weiß aber nicht, warum. Ich weiß nicht, ob die von oben nicht wollen oder von unten...

ワイヤーがなぜか消えている。人との接触が私にはない。なぜなのか私には分からない。上にいる方々がそれを望まないのか、それとも下の方々が望まないのだろうか…

⑧ 朗読 1 Lesung

ヘルダーリンの小説『ヒューペリオン』(Friedrich Hölderlin: Hyperion)からの引用。生誕によって生じた苦しみを死によって純化し、純粹なる精神に戻りたいという願望、生に留まりたいという願望の葛藤を描く。

Am Tage, da die schöne Welt für uns begann, begann für uns die Dürftigkeit des Lebens und wir tauschten das Bewußtsein für unsere Reinigkeit und Freiheit ein.

(…)

und es sehnt der Geist zum ungetrübten Aether sich zurück. Doch ist in uns auch wieder etwas, das die Fesseln gern behält,

私たちにとって美しい世界が始まったその日、私たちにとって人生の窮乏が始まった。私たちは純粹さと自由の代わりに意識を交換して得た。

(…)

そして精神は、曇りのないエーテルに戻ることを切望する。しかし、私たちの中にはまた、足かせをつけたがる何かもある。

⑨ 聖歌 1 Lied

マーラーのリュッケルト歌曲集から『私はこの世に忘れられ』(Ich bin der Welt abhanden gekommen)の歌詞。

Ich bin der Welt abhanden gekommen,

Mit der ich sonst viele Zeit verdorben,

Sie hat so lange nichts von mir vernommen,

Sie mag wohl glauben, ich sei gestorben!

私はこの世に忘れられている。

いつもは、多くの時をこの世と過ごしてきたのだが。

この世ではもう長い間、私のことを聞いていない。

この世はおそらく、私が死んだと思うのかもしれない!

⑩ シュリンゲンジーフの言葉の引用 5

⑤と同じ内容

⑪ シュリンゲンジーフの言葉の引用 6

⑥と同じ内容

⑫ 朗読 2

⑦と同じ内容

⑬ 聖歌 2

⑧と同じ内容

⑭ メキシコ人作家サルバドール・エリゾンド (Salvador Elizondo) の著作からの引用 (出典不明)。人間の価値、人生の意味への問いかけと、答えを見つけることの不可能性を述べる。シュリンゲンジーフは原文の肯定文を疑問文に変更している^{注2)}。

Sind wir vielleicht eine Lüge? (...) Sind wir vielleicht ein Film, ein Film, der kaum einen Augenblick lang dauert? (...) Sind wir die Gedanken eines Wahnsinnigen? Sind wir ein Druckfehler?
(...)

Sind wir ein geheimer Gedanke? Ich weiß es nicht.

私たちはもしかして嘘なのか? (...) 私たちは映画なのだろうか?ほんの一瞬も続かない映画なのか? (...) 私たちは狂人の思考なのだろうか? 我々は誤植なのか?

(...)

私たちは秘密の思考なのだろうか? 私には分からない。

⑮ ハイナー・ミュラーのインタビューからの引用 (Heiner Müller: Verwandlung aus: Ich bin ein Landvermesser, Gespräche mit Alexander Kluge, Hamburg 1996)

ミュラーは本質的なものは変容 (Wandlung) であることを強調し、死を最終的な変容と捉えている。そしてこれから死を迎える人の不安が抛り所ともなり土台ともなることを説いている。

WANDLUNG

Das Wesentliche ist die Verwandlung. Das Sterben. Und die Angst vor dieser letzten Verwandlung ist allgemein, auf die kann man sich verlassen, auf die kann man bauen. Und das ist auch die Angst des Priesters und die Angst der Gemeinde. Und das Besondere ist eben nicht die Anwesenheit des lebenden Priesters oder des lebenden Gottesdienstbesuchers, sondern die Anwesenheit des Potentiell Sterbenden.

変容

本質的なものは変容です。つまりは死ぬこと。そして、この最終的な変容に対する不安は普遍的なものであり、それを抛り所とし土台ともすることができるのです。そしてそれは司祭の不安でもあり、信徒の不安でもあります。ただし特別なことは、生きている司祭や生きている参列者の存在ではなく、死にゆく可能性のある人の存在なのです。

⑯ 新約聖書の「最後の晩餐」からの引用

(パンフレット全文引用。訳文は論者による)

Denn in der Nacht, da er verraten wurde, und sich aus freiem Willen dem Leiden unterwarf, nahm er das Brot und sagte Dank, brach es, reichte es seinen Jüngern und sprach: Nehmet und esset alle davon. Das ist mein Leib der für euch hingegeben wird.

裏切られ、自由意志によって苦しみに身をゆだねた夜、イエスはパンを取って感謝の言葉を述べ、パンをちぎり弟子たちに配って、こう言われた：このパンを受け取り、すべて食べなさい。これは、あなたがたのために身をささげた私のからだです。

⑰ シュリンゲンジーフの言葉の引用 7

イエスが「自由意志によって苦しみに身をゆだねた」ことをシュリンゲンジーフは批判し、「人間の生きる意志の方を優先する」と主張する。

Aus freiem Willen dem Leiden unterwarf? Das möchte ich mal sehen. Aus freiem Willen unterwarf, heißt auf der Zeitachse auch zu einem Ende kommen zu wollen. Hier täuscht sich Jesus. Weil aus freiem Willen unterwerfen heißt ja „Gut, Erschießt mich jetzt!“ Kennen wir aus Kitschfilmen, bringt aber in der Realität gar nichts, weil der menschliche Geist doch zu klein ist um die Großzügigkeit zu entwickeln; beschließt ihr meine Grenze. Nein, der Organismus besteht aus Stammhirn, und das Stammhirn schlägt auch dann noch weiter, wenn der andere bereits geschossen hat. Halleluja!

自分の自由意志で苦しみに身をゆだねたというのか？ それならそれを見てみたいものだ。自分の自由意志で身をゆだねたということは、時間軸の上でも終わりを迎えたかったということでもある。ここでイエスは勘違いしている。なぜなら、自由意志で身をゆだねるということは、「さあ、撃ち殺してくれ！」ということだからだ。キッチュな映画ではおなじみだが、こんなことをしても現実には何ももたらさない。人間の精神は小さすぎて、こうした寛大さを育むことはできない。「汝たちよ、私の限界を決めくれ」というのか。いや違う。生物は脳幹からできているのだ。だから相手がもう弾を発射しても、脳幹はさらに脈を打ち続けるのだ。ハレルヤ！

⑱ 新約聖書の「最後の晩餐」からの引用と、ハイナー・ミュラーのインタビューを挿入したシュリンゲンジーフによる翻案文

ミュラーは生と死のみならず「変容」(Verwandlung)という可能性があることを主張する。ただし変容が永続することに伴う不安定さを指摘し、変容がいったん終息するための地面が必要だと指摘する。

Ebenso nahm er nach dem Mahl den Kelch, Dankte wiederum, reichte ihn seinen Jüngern und sprach: Es gibt nicht nur den Tod und die Geburt, sondern es gibt in dem Sinne um die Verwandlung, dass ich krank werde oder mich verändern muss. Es gibt nicht nur den

Tod und die Geburt,sondern es gibt in dem Sinne um die Verwandlung,dass ich krank werde oder mich verändern muss.Ich lebe in einer Geschichte, in einer möglichen Welt, zum Beispiel hier jetzt grade. Und der Körper verändert sich, wenn dieser Ort sich verwandelt, er unmöglich wird. Der Boden wird mir dann entzogen.Ich brauche einen Boden unter den Füßen, anderenfalls beginnt die Spirale der Wandlungen, die erst aufhört,wenn ich den eigenen Ort wieder gefunden habe.

同じように、食事の後イエスは杯を取り、もう一度感謝を捧げ、弟子たちに杯を手渡し、こう言った：「死と誕生だけでなく、私が病気になったり、変わらなければならないという意味での変容もある。私は歴史の中で、可能な世界の中で生きている。たとえばまさに今、ここで。この地面が私から失われてゆくこともあるだろう。だが私は足元に地面が必要だ。さもないと変容のスパイラルが始まり、それが止まるのは自分の居場所を再び見つけたときになってしまう。

⑲ 結語 Schlussworte

シュリンゲンジーフが病床で経験した「自分の命を犠牲にしても隣の病床にいる瀕死の子供を救いたい」という思いを語る。しかし後にこの子供が瀕死状態にあるのではなく自閉症の症状だったことを知り、さらに母親の子供への深い愛を知ってから、「子供も自分も生きていだけなのだ」という自覚に至る、という経過を告白する。

(一部引用)

Und dann ist heute Merkwürdiges passiert. Er hat nebenan ein Kind schreiengehört. Ganz laut. Und da hat er gedacht, oh Gott, das Kind stirbt, dem geht's auch so dreckig, das ist auch so traurig und verlassen und braucht Liebe. Und da hat er gesagt, dann lasst doch das Kind leben und lasst mich sterben. Aber er hat das nicht pathetisch gesagt, sondern wirklich. Das war ganz ernsthaft dieses Gefühl.

(...)

Und er sprach zu sich selbst: Das Kind und ich, wir wollen beide nichts mehr,als einfach zu leben. Und das hört sich jetzt vielleicht auch zu pathetisch an oder so, aber ich glaube, in dem Rhythmus dieser Geschichte liegt etwas, nämlich dass man plötzlich begreift, dass man immer nur das Entweder / Oder kennt aber nie das Alles Zusammen. So wie heute, 奇妙なことが起こった。隣で子供の叫び声が聞こえたのだ。とても大きな声で。そして彼は思った、ああ、この子は死にかけている、この子もこんなひどい目に遭っている、とても悲しく、見捨てられ、愛情を必要としている、と。そして彼は言った、その子を生きかし、私を死なせてください、と。でも、哀願するように言ったのではなく、本心からそう言ったんだ。この気持ち本当に真剣なものだった、

(...)

そして、彼は自分にこう語りかけた 子供も私も、ただ生きていたいだけなんだ。あまりに哀願するような言い方かもしれないが、この物語の進行のリズムには何かか宿っているように思う。すなわち、自分が知っているのは「あれか・これか」だけで、「すべてが一体」であるということと全く知らない、ということとを突然に理解するのだ。

注1) シュリンゲンジーフが公演で使用した自身の文章は、彼の病床日記である次の著作にも記されている。Christoph Schlingensief: So schön wie hier kanns im Himmel gar nicht sein!: Tagebuch einer Krebserkrankung, (天国ではここほど素晴らしくはあり得ない!がん闘病日記) Kiepenheuer&Witsch20. 2009.

注2) Vgl. Zorn, S.136.

上記のように、これらの引用文の原典は一般の観客には特定できないほどに多様であり、それぞれの引用文自体の解釈可能性もまた多様である。それらが次々と提示されることによって、個々の作品解釈は次々とオーバーラップして拡散・増殖してゆく。ただ全体としては、主要なテーマとして「死に直面する人間の死生観の提示と揺らぎ」があるのは明らかである。引用文を重ね合わせることによってシュリンゲンジーフは複数の死生観を提示しながら、その間で揺らいでいる。こうした揺らぎを越えて、彼が「すべてが一体である」、つまりは「生と死は重なりあい一体なのだから死に対して不安を感じる必要はい」という境地にまで達することができたのか否かについて、映像分析を多少交えながら次章で簡潔にまとめてみたい。

IV. 『不安の教会』における芸術と宗教の越境（不）可能性

シュリンゲンジーフ演出『パルジファル』の最終場面に提示された「ウサギの死骸が腐敗し蛆に蝕まれて解体されてゆく映像」²⁹⁾は『不安の教会』の第一部最終場面でも用いられているので、彼にとってとりわけ重要な映像であることが分かる。後者では「腐敗した死骸から新たに人が再生する」

29) 北川 48頁。

変容過程が示され、「死から再生への可能性」というモチーフが強調されている。ただこうした可能性は第二部になると次々と相対化され批判的に検証されてゆく。

ウサギの死骸は、シュリッゲンジーフが生涯依拠したヨーゼフ・ボイスのアクション「死んだウサギにどのように絵を説明するのか」(Wie man dem toten Hasen die Bilder erklärt, 1965)を想起させる。ボイスは自分の「ウサギ観」を次のように説明している。

Für mich ist der Hase das Symbol für die Inkarnation, Denn der Hase macht das ganz real, was der Mensch nur in Gedanken kann. Er gräbt sich ein, er gräbt sich einen Bau. Er inkarniert sich in die Erde, und das allein ist wichtig. So kommt er bei mir vor. Mit Honig auf dem Kopf tue ich natürlich etwas, was mit denken zu tun hat. Die menschliche Fähigkeit ist, nicht Honig abzugeben, sondern zu denken, Ideen abzugeben. Dadurch wird der Todescharakter des Gedankens wieder lebendig gemacht. Denn Honig ist zweifelslos eine lebendige Substanz. Der menschliche Gedanke kann auch lebendig sein. Er kann aber auch interlektualisierend tödlich sein, auch tot bleiben, sich todbringend äußern etwa im politischen Bereich oder der Pädagogik.³⁰⁾

私にとって、ウサギは受肉の象徴です。なぜならウサギは、人間が思考の中でしかできないことを全く現実のものとするからです。ウサギは地中に潜り、地下で建物を作る。ウサギは大地の中に受肉するので。重要なのはそれだけです。ハチミツを頭にのせて、私はもちろん思考に関係することをします。人間の能力はハチミツを出すことではなく、考えること、アイデアを出すことです。そうすることで、思考

30) <https://beuysart.org/kunstwerke/wie-man-dem-toten-hasen-die-bilder-erklart>

という死の性質が生き返ります。ハチミツは間違いなく生きている実体だからです。人間の思考もまた生きることができるのです。しかし、それはまた、たとえば政治的領域や教育学などにおいて、知性を進めると致命的であったり、死んだままであったり、自らを表現して死に至ることもあり得ます。

『不安の教会』においてシュリンゲンジーフがボイスのこうした「受肉 (Inkarnation)³¹⁾」をシンボル化した生き物としてのウサギ観」を踏襲していることは明らかである。この映像を加工して、ウサギから人への変容と再生の映像を付け加えたことから、シュリンゲンジーフが自身をウサギに重ね合わせ、自らの死と再生のビジョンを肯定的に提示していることは明白である。しかしこの映像が第一部の最終場面に位置している点に注目したい。というのは第二部の最終場面ではアンゲラ・ヴィンクラーが上記の⑩結語を読み上げた後に、ミサの衣装を着た子供たちを次々と殺害するという対照的なシーンが挿入されているからである。その後に舞台上に置かれた二つの棺が観客には見えてきて、二台のメトロノームがリズムを刻む「カチカチ」という音を長く響かせる。その音が停止することによって『不安の教会』は幕を閉じる。つまりメトロノームの音が心拍音とオーバーラップし、それが止まることを暗示して終わるのである。それがシュリンゲンジーフの「不安からの解放」と解釈できるのか否か、については舞台映像の分析が必要となるので稿を改めて論じたい。本稿が提示した公演パンフレット引用文の検証結果としては、『不安の教会』における芸術

31) 「受肉」に関する辞書的意味は次の通りである。「インカルナチオ *incarnatio* キリスト教用語。受肉 (じゅにく)、託身 (たくしん) と訳される。*incarnatio* という語はラテン語の *caro* (肉) に由来しており、肉をまとうことを意味し、三位一体の第2位である子が、人類救済のため、人間性をとって、ナザレのイエスという歴史的人物になったことをいう。」ブリタニカ・オンライン・ジャパン 中央大学図書館データベース。

と宗教の越境の可能性, 具体的には「芸術によって生と死の境界を越境する可能性」に対するシュリングenjフの見解は肯定的であると解釈することができる。それに対して舞台の方ではこうした可能性がさらに批判的に検証されているからである。

